

## 「被災地宮城県を訪問して」

1995年文学部卒業

石井 英幸

阪神大震災が起きた1995年、私は4回生でした。交通機関がマヒし、直ぐにボランティア活動に行くことができず、2度訪問しただけで卒業を迎えてしまった。

あれから17年、私は出身地の福島で東日本大震災を経験することになった。揺れが大きく、いつになったら収まるのか恐怖心でいっぱいだった。まさかあれほど大きな津波が押し寄せ、何千人もの命を奪うとは…。

震災後、地元の金融機関に勤務する私は福島の復旧・復興に全力で取り組んできたが、宮城県の被害状況や復興の進捗具合を見学し参考にさせていただきたいと考え、この復興ツアーに参加させていただいた。

集合場所となった仙台駅は、人がごつた返し賑わいを見せていた。隣接する商業施設も買い物客で溢れ、まさに復興の象徴のような、印象を持った。

日本三景の一つ、「松島」は思っていたより津波被害が小さく、海岸近くに軒を連ねるお土産店は倒壊したところはない様子で安心した。ただ、2年前に家族4人で行ったときに比べ、国道の渋滞はあまり見られず、観光客が減っているように感じた。

夕方の勉強会で、OBで柵木の屋石巻水産の木村社長から震災の被害状況や再建に向けた取り組みについて伺ったが、復興の道のは決してスムーズに行くものではないということが心に響いた。国の復興補助金等により工場が再建されればそれで元通りという構図ではないと教えられた。一度失い、奪われた販路を回復するのは容易ではなく、関連する企業も再開されなければ効率の悪い経営を余儀なくされる。木村社長には、夜の懇親会でも様々なアドバイスをいただいた。

宿泊した温泉旅館は海岸のすぐそばに位置し、翌朝の日の出は最高にきれいで、穏やかな海であった。懇親会の後初めて会う者同士7人で夜中の2時半まで話し込んだため、太陽が少し眩しすぎたが、それはそれで楽しい思い出ができた。

2日目の朝までは、宮城県の復興の速さを感じ、ある意味福島との違いをうらやましく思っていたのも束の間、南三陸町へ行くと、そこには別世界が広がっていた。仙台や松島とは様相が一変し、津波が襲ってから1年半以上が経過しているのに、かつて家が密集し漁港としてにぎわった志津川地区は根こそぎ家々が流されていた。わずかばかりの鉄筋コンクリート造りの建物が数件点在し、防災無線センターは鉄骨だけが今も残っているに過ぎなかった。高台への集団移転や土地の所有権問題等々、そう簡単には街づくり計画は進まないようである。

被災者の立場から、今回のようなツアーで被災地を訪れるということは非常にありがたく、わざわざ来てくれたことだけで元気づけられると感じており、素晴らしい復興支援の一つだと感じている。

今回の企画をご担当された校友会事務局、復興委員会、そして宮城県校友会の皆様、遠方より東北まで来て下さった校友会の皆様へ心より感謝し、東北の復興に全力で取り組んでいくことを約束したい。

提出が遅くなり失礼いたしました。立命館大学校友会の益々のご発展を心より祈念いたします。